

大学生による高齢消費者 被害防止寸劇の出前講座

— 学生と高齢者とが相互に学べる機会 —

尾島 恭子
Ojima Kyoko

金沢大学人間社会研究域学校教育系教授

専門は家政学原論、消費者教育。大学では教員養成系学部にも所属し、小・中・高の家庭科の教員をめざす学生を中心に指導している。

このコーナーでは、消費者教育の実践事例を紹介します。

石川県では、2014年度から「高齢消費者被害防止寸劇出前講座事業」を展開しています。本事業は県内の大学および短期大学の学生が制作した寸劇を、地域の老人会などで披露することにより、高齢消費者被害の防止と、学生の消費者問題に関する理解を深めることを目的としています。今回は2014年度および2015年度に本事業に取り組んだ金沢大学学校教育学類の学生の活動を紹介します。

事前研修会への参加

2014年4月、石川県県民生活課(以下、県)で当該事業の募集が開始されました。本事業に応募したのは、本学類からは、家庭科教員養成課程に在籍している学生たち。家庭科の教員として必要な資質と知識を学んでいるため、消費者教育には関心があったと言えます。ただし、寸劇に関しては素人で、かつ対象が高齢者です。応募はしたものの、どうしたら高齢者に分かりやすく、うまく演じ、伝えられるのか、学生たちも最初は不安のほうが大きかったです。

そこで、まずは、初夏に県開催の事前研修会に参加しました。事前研修会では高齢消費者被害の状況等についての説明の後、「出前講座の作り方」の話聞くなど、寸劇企画のポイントや分かりやすく伝える技術を学びました。

寸劇上演に向けて

上演テーマは応募する段階で考えていましたので、まずはそのテーマに沿ってシナリオ作り

です。シナリオは、国民生活センターのホームページに掲載されている「模擬体験シナリオ*」を始め、自治体や消費者啓発に取り組む団体が公開しているシナリオを参考に作成しました。

特に2014年度は学生たちも初めてのことがかりでしたが、寸劇の練習や小道具製作に励みました。そして、秋頃からは県が学生の公演可能な日程と各市町の希望を取りまとめながら調整した数カ所の公演先にて寸劇を披露しました。

親しみやすく分かりやすい 参加型の講座へ

上演テーマは、2014年度は「送りつけ商法」、2015年度は「催眠商法」を取り上げました。当初は標準語で書いていたシナリオも、見に来た人たちに親しんでもらえるようにと、方言を取り入れるようにしました。また、大きな字のボードを作成したり、話し方も大きな声でゆっくりと話すように心がけたりすることで、分かりやすい寸劇になったと思います。

2014年度の送りつけ商法の寸劇は、「『わたしは大丈夫!』それホント?』というタイトルとし、自分は悪質商法に引っかかるわけがないと思っている人も被害にあってしまうこと、その予防には近隣の人との関係構築が重要であることを伝えようと思いました。その際、単に消費者被害にあわないようにといった被害防止のみならず、消費者市民社会の形成者として消費者教

* http://www.kokusen.go.jp/mimamori/mj_volunteer.html#scenario

育の観点から、高齢者は「長年の知恵と経験を次の世代に伝える伝承者」であるとのメッセージも込めることにしました。具体的には、送りつけ商法の被害防止については近所の人に助けられつつ、一方で小学校の「おばあちゃんの知恵募集事業」に参加して持ちつ持たれつの協力関係を確認する、というものです。

2015年度の催眠商法の寸劇は「ただより高いものはない」というタイトルで、催眠商法会場に一步足を踏み入れた主人公が結局高額の布団を買わされてしまうという設定としました。その寸劇では、見に来た高齢者にも販売会場にいる客となってもらい、実際に「これ欲しい人？」と業者役が聞くと、「はい」と手を挙げてもらう参加型とすることで、臨場感があり、また楽しみながら催眠商法を意識してもらえる内容となるよう工夫を凝らしました。



写真 出前講座のようす (上・左下は2014年度、右下は2015年度)

学生と高齢者のつながりと学び

当初は不安の大きかった学生たちも、公演を繰り返すうちに、会場では温かく歓迎してもらい、時には寸劇を見た高齢者との意見交換を行うなど、世代間のつながりも確認でき、学生自身にも新たな学びが生まれました。また、高齢消費者被害の未然防止は、高齢者への情報発信のみならず、周囲のかかわりも重要であること、さらに、自分たちも含めて若い人のかかわりも重要であることを学生自身が自覚できました。

高齢者だけでなく学生にとっても学びの場となり得た本事業の効果は、単に座学だけの学びより高いのは言うに及びません。本事業へ応募した時点では、必ずしも学生全員が積極的な態度で臨んだわけではありませんでした。しかし、2年目の2015年度には前年に出前講座を経験した学生たち全員が、積極的に取り組んでいたのは印象的でした。

おわりに

本事業はほかにも他大学を含めて4団体が参加しました。県の担当者は、公演先と学生との日程調整が大変だったかとは思いますが、県のコーディネートにより学生の学びと高齢者への啓発をうまくマッチさせることができました。本取り組みは、学生と高齢者双方にとって良い機会を与えられ、まさに一石二鳥、一挙両得、効果的な事業と考えられます。

寸劇を行った学生の感想

私たちは全員寸劇の経験もなく、初めは不安ばかりでした。しかし、県内の高齢者の人々のために少しでも力になればという思いで練習を重ねました。初めての公演は約300人の前で披露となり、緊張で失敗した部分もありましたが、観客の皆さんが温かく受け入れてくださったので私たちも伸び伸びと演じることができました。特に2015年度は催眠商法をテーマに観客参加型の寸劇にしましたが、観客の皆さん

が積極的に参加してくださり、非常によい寸劇にすることができました。

最初は私たちが高齢者の力になりたいと思って始めた取り組みでしたが、私たちが観客の皆さんに支えられることも多く、人のつながりを感じられた事業でした。今回の私たちの寸劇を通して、少しでも高齢者の被害防止につながれば幸いです。